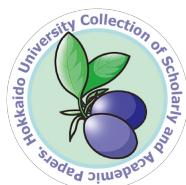




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第61回研究協議会 〈講演・パネルディスカッション〉報告
Author(s)	田島, 貴裕
Citation	日本通信教育学会研究論集, 平成25年度, 75-83
Issue Date	2014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56791
Type	journal article
File Information	Tajima.pdf



第61回研究協議会 ＜講演・パネルディスカッション＞報告

田島 貴裕

日本通信教育学会第61回研究協議会では、看護師で随筆家の宮子あずさ博士による講演と、社会人の通信制大学院における学びをテーマにしたパネルディスカッションが行われた。宮子氏およびパネルディスカッションのパネリストの方々は、いずれも通信制大学・大学院において豊富な学びの経験があり、研究協議会の参加者には非常に有意義で興味深いイベントとなった。以下、講演およびパネルディスカッションの概要を報告する。

I. 講演報告 講演者：宮子あずさ氏

「始まりは大学通信教育！ 学ぶ看護師の人生すごろく―短期大学士から博士まで―」

1. はじめに

宮子氏は看護専門学校を卒業後、働きながら大学通信教育で学び、準学士1つ、学士2つ、修士1つの学位を取得している。その後、通学制の大学院では博士（看護学）の学位を取得している。現在も看護師を続ける一方で、大学、大学院では働きながら学んでいる看護師の支援、指導も行い、自身の研究活動も続けているという、「看護業界の学び大使」ともいうべき方である。また、ご存知の方も多いと思うが、宮子氏のお母様は、主に女性問題や平和問題に取り組んでいた作家・評論家の吉武輝子氏である。お母様の吉武氏は多数の著作を世に送り出したが、宮子氏もまた、看護師として働きながら多くの看護に関する書籍を出版しており、執筆・講演と、幅広い活躍をされている。そのような背景をもつ宮子氏であるが、著作のなかで異彩を放っているのが「大学通信教育は卒業できる（メディカ出版、2004年）」である¹⁾。この本には、大学通信教育への熱い想いが描かれており、今回、その通信制に対する「熱い想い」をご講演頂いた。質疑等を含めて1時間という、講演としては短い時間ではあったが、大学通信教育を始めた動機、大学通信教育の学びの中から得たこと、そして学位取得までの過程が惜しげなく語られた。

冒頭の自己紹介では、生い立ちや現在の看護師としての業務、教育研究の状況について紹介があった。進路選択や学びへの考えに関する話からは、ご両親に対する思いや感情が大いに影響している様子が伺えた。看護師としての職歴は、看護専門学校を卒業してから27年目になるとのことである。講演中、看護師生活と大学通信教育との関わりが図示されたが、通信教育での学びは実に15年間にも及んでおり、常に学び続けているという印象であった。約15年間の大学通信教育での学びののち、2013年には東京女子医科大学大学院で博士（看護学）の学位を取得、現在は出身大学院等で後進の研究支援や指導も行っており、そこでの奮闘についても触れられた。

自己紹介の後、自身の大学通信教育の学びをすごろくに例え、学びの動機や学習の苦勞、喜びについて述べられた。以下、“人生すごろく”に沿って講演をご紹介したい。

2. 学ぶ看護師の人生すごろくくふりだし～修士まで>

看護師生活も3年目に入ると一人前になったという実感が得られたが、5年目頃から徐々に仕事への失意と無力感にとらわれるようになり、常に何かへ活路を見出したいと思っていたとのことである。看護師、特に死に直面する臨床現場では、自らの知識や経験、力量に対して自信喪失や不安を抱いたり、心身の疲労から職務意欲の低下や無力感が起こったりすることは、長年顕在化している問題である。その結果、新人看護師や「一人前」に成り立ての3年目から5年目に離職率が非常に高くなるといわれている²⁾。宮子氏の「失意と無力感」も例外ではないのだろう。そのような状況下で、たまたま新聞広告で目にした大学通信教育へ通うこととなる。大学事務局が近いから、という理由で武蔵野美術大学短期大学デザイン科を選択したそうであるが、「レポートを書き、試験を受け、単位取得し、卒業に至る」という一連の学習プロセスは、大きな達成感・満足感を実感した、と力強く語られた。曰く、「大学通信教育に味をしめ、やめられない状態に！」とのこと。学びに対する語りでは、頑張った分だけ目に見えた成果（単位、学位）があることへの楽しさや、看護というものを外から見る機会を得たことで新たな発見があったことなどについて触れ、非常に喜びに溢れた様子が印象的であった。

その後、産能大学経営情報学部経営情報学科へ入学し、卒業研究は、武蔵野美術短大における学びの成果から浮き彫りになった看護をテーマに取り上げ卒業する。さらに、「看護職と大学通信教育」を研究テーマに、明星大学大学院人文学研究科教育学専攻（通信教育課程）で学ぶ。当時は、通信制大学院が制度化されて間もないころであり、「山があるから登る」という境地で、自然と進学したそうである。大学院修了後は、武蔵野美術大学芸術文化学部へ入学し、今度は看護とは離れ、万年筆を題材に卒業研究を行う。一度、武蔵野美術短大で学んだことから、次は4年制へ入学したいという強い想いがあったという。

3. 学ぶ看護師の人生すごろく<一回休み>

大学通信教育の学びに対する喜びを見出し、挫折のない、チャレンジングな通信教育生活を送っているような印象を受けたが、実は3回ほど中途退学したそうである。スクーリングが多い大学で仕事の都合上通えなかったであるとか、レポートが手書きに限定されていたからなど、様々な理由であった。手書きのレポート作成は結構大変であり、一度パソコンで試行錯誤しながらレポートをまとめ、その後手書きで書き写す、という二重の作業を行っている方も多いと思う。しかし、大学側の教員からすれば、手書き文字は履修学生を垣間見ることができるものであるし、コピペを防ぐといった利点もあるのだろう。無論、中途退学の理由は、レポートの手書きだけではなく、講義内容などの要因もあるのかもしれないが、退学理由としては面白い（失礼！）ものであった。

4. 学ぶ看護師の人生すごろく<（とりあえず）あがり>

宮子氏の学びはまだまだ続く。2009年には、東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程へ入学し、2013年、「看護師の実存から探る臨床看護の本質と、それを職業として生きる意味」と題した博士論文を提出、看護学の博士を取得する。この学位論文は、哲学者ジャン＝ポール・サルトルの実存主義に基づき、看護師の職業観や体験を分析した哲学的研究である。時間の都合上、研究内容の紹介は割愛されたが、博士論文ではこれまでの学びから得たものを纏め上げると同時に、この研究を通して、宮子氏の「学び」に対する考えが一層瞭然たるものになった様子が伺えた。講演の最後では、「『人生はどこまでその人に責任があるか。人生はどこまで選択できるのか』という実存的な問いに取りつかれている」と述べられ、この問いを考え続けることが自身の学びの原動力であり、また、看護の世界が最も切実に考えられるとも述べられた。問い続けること、考え続けることが人生には重要であるという“人生すごろく”であったが、宮子氏のすごろくは遠からず2巡目が始まるに違いないと感じた。

5. おわりに

講演の最後には、若干の質疑応答が設けられた。質問のひとつに、白石会長から「通信制での看護師育成」の可能性が問いかけられた。以前は、通信教育では困難だと言われていた音楽や芸術分野でも、インターネットの発展によって現在ではいくつかの通信制大学・大学院が設置されている事例を挙げ、同様に看護教育の分野にも適用できる可能性があるかという問いである。宮子氏の見解では、まず、看護師免許をすでに取得している場合は、実習・実技には全く問題のないことから、看護学が学べる通信制大学、通信制大学院の設置は当然可能であるし、むしろ無いことが不合理、との旨の回答があった。実際、放送大学や医療福祉系の通信制大学では多くの看護師が学士号取得のために在籍したり、大学評価・学位授与機構へ学士（看

護学)の学位を申請していることを考えれば、看護学の学位が取れる大学等の設置が望まれるところである。また、宮子氏は、看護師免許を持たない場合であっても、実習や実技の部分を面接授業で適切に実施すれば、通信制で看護師を育成することは不可能ではないと述べた。さらに、前述の質問に関連して、看護の世界では働きながら学ぶことに対してネガティブであることや、准看護師から正看護師への通信教育による免許取得方法はあるが制約が厳しいこと³⁾、などにも言及した。准看護師については、主に医師サイドから資格の廃止に対して根強い反対があったり、准看護師養成所における奨学金と雇用契約の問題(一時期「お礼奉公」として話題になっていたが)があるなど、現在もさまざまな問題が残っている。このような現状と、看護師を志望する社会人の増加、看護師の継続学習のニーズに対し、通信制大学、大学院が果たしうる役割は非常に大きいと言える。しかし、一方で、看護系大学、学部の増設や実習時間の減少により、看護基礎教育の質の低下も懸念されており、質保証という点については、通学制、通信制の区分なく今後の議論が必要であると感じた。

宮子氏の大学通信教育に関する語りは、終始にこやかで、時に力強く、聴衆者も学びに対する想いを揺さぶられる内容であった。宮子氏の大学通信教育に対する姿勢は、ちょうど戦後に文字に枯渇し、学びに餓え、通信教育の門をたたき、というようなものに近いのかもしれない。残念ながら、著者のこの稚拙な報告文では、宮子氏の述べたい、「熱い想い」をとても伝えきれていない。当日、講演へ参加できなかった方には、宮子氏の多くの著作物を閲読していただき、学ぶことの意味、生きることの意味、そして人生の目的や価値といった観念について感じ取っていただければと願う。最後に、講演に先立って、宮子氏から寄せられたメッセージを記しておく。

「学ぶことは、自分の引き出しにいつ役立つかわからないものをしまっていく作業です。それは、ある時必ず、大事なことを考える手がかりになります。また私は、大学通教で修士までとっていたおかげで、22年間の常勤看護師生活を終えた後、博士後期課程に進学できました。積み重ねた学習歴は、人生の岐路で、身を助ける力になります。」

■宮子あずさ氏／看護師・著述業、博士(看護学) 略歴

◇職業(講演時)

都内精神科病院訪問看護室 非常勤看護師

人間総合科学大学人間科学部 非常勤講師

東京女子医科大学看護学研究科看護職生涯発達学 非常勤講師

◇学習歴(卒業・修了)

武蔵野美術大学 短期大学部通信教育部デザイン科グラフィックデザイン専攻 卒業

産能大学 通信教育部経営情報学部経営情報学科 卒業

明星大学 大学院人文学研究科教育学専攻 修士課程(通信教育課程) 修了

武蔵野美術大学 造形学部通信教育部芸術文化学科造形研究コース 卒業

東京女子医科大学 大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程看護職生涯発達学分野 修了。博士（看護学）

注

- 1) 残念ながら現在は絶版となっている。概要は、日本通信教育学会会報通巻40号「通信教育のこの1冊」を参照されたい。http://jade.r-cms.biz/topics_list22/（参照日 2014. 5. 27）
- 2) 日本看護協会「病院における看護職員需給状況調査」
- 3) 2004年から通信制による教育が開始されたが、10年以上の経験をもつ准看護師に限定されている。

Ⅱ. パネルディスカッション報告「社会人の学びの場としての通信制大学院を考える」

1. 概要

日本通信教育学会第61回研究協議会において、「社会人の学びの場としての通信制大学院を考える」をテーマに、パネルディスカッションが開催された。今回のパネルディスカッションは、実際に通信制大学院で学ぶ社会人の方をパネリストとして招き、学びの喜びや苦勞、課題の克服などについて討論していただき、今後の社会人の学びの場としての通信制大学院の在り方を探ることを目的とした。パネリストは、稲垣氏、木村氏、藤江氏の3名、司会役は、石原氏（本学会監事）、小林氏（本学会幹事）の2名である。パネリストの稲垣氏、木村氏、藤江氏の3名は、いずれも働きながら通信制大学院を修了しているのみではなく、社会人学生として、複数の通信制大学、通信制短期大学、あるいは通学制の大学院を卒業・修了するという経歴を持つ。今回のパネルディスカッションでは、その豊富な経験に基づき、特に学習計画・学習方法、ゼミや修士論文指導などに関して、社会人大学院生の視点から述べられた。はじめに、稲垣氏、木村氏、藤江氏の順に、学習歴を中心に10分程度の自己紹介があった。その後、司会の石原氏、小林氏から、大きく分けて、①学習計画に関すること、②修士論文に関すること、③通信制大学院の修了後のキャリア形成に関すること、のテーマが提示され、討議が行われた。

パネリスト：

- | | |
|-------|--|
| 稲垣諭 | 武蔵野大学 大学院通信教育部人間科学研究科人間学専攻修了、メガバンク
都内支店勤務 |
| 木村知洋 | 京都産業大学 大学院経済学研究科（通信教育課程）修了、IT 企業勤務 |
| 藤江慶一郎 | 京都造形芸術大学 大学院芸術研究科（通信教育）芸術環境専攻修了、電機
メーカー勤務 |

司会：

石原朗子 桜美林大学 大学院国際学研究科（通信教育課程）修了、総合研究大学院大学
小林建太郎 株式会社デジタル・ナレッジ

趣旨：

今回は、通信制大学院で学ぶ社会人の方にご登壇いただきます。これまであまり語られてこなかった、通信制大学院における学びの喜びや苦勞、発見をご発表いただき、社会人の学びの場としての通信制大学院の実態について再考し、その将来像を探っていきます。通信制で学ぶ社会人には改めてモチベーションを高める機会を、新しく学ぼうと考えている方にとっては一歩を踏み出すチャンスを提供できればと考えています。さらに、通信教育の研究者、提供者側の教員や職員の方には、これまでの教育研究成果の確証を得て新たな研究視点や教育改革への転機となることを願っています。

2. 自己紹介

稲垣氏の大学通信教育の学びの発端は、産業カウンセラーという資格を取得するために、産能大学（現：産業能率大学）の通信教育課程で学び始めたことである。元来、さまざまな資格を取得することに前向きであり、各種合わせて200種類を超える資格ホルダーである。産能大学の後には、産業能率大学のMBA（通学課程）、明星大学大学院（通信教育課程）、武蔵野大学大学院（通信教育課程）を修了し、パネルディスカッション時点では放送大学、放送大学大学院、自由ヶ丘産能短期大学にも在籍している。通信制での学びの動機としては、時間的制約と場所、そして費用の面を挙げていた。通学制の大学院の経験もあることから、仕事上、夜間の講義などへの出席も困難なことがあり、通学するには多くの制限がある点を強調している。ただし、通信制のデメリットとして、ゼミや講義の“場の空気”が分かりにくく、孤独な学習になりうる点を挙げていた。

次に、木村氏から学びの概略が述べられた。木村氏は理系大学の出身であるが、文系学部へのコンプレックスと興味から、慶應義塾大学の通信教育課程で学び、以降、中央大学、産業能率大学、日本福祉大学、京都産業大学大学院、自由ヶ丘産能短期大学（いずれも通信制）を卒業・修了し、パネルディスカッション時点では放送大学に在籍している。それ以外にも、多くの通信制大学、通信制大学院において科目等履修生などで在籍経験がある。大学通信教育での学びは、当初の文系科目を勉強したいというきっかけから、現在では「山があるから登る」という誘因へ変化しているとのことである。なぜ通信制を選択したか、という点について、稲垣氏と同様に仕事と費用の面を挙げ、働く社会人にとっては、職場環境が非常に恵まれていないかぎり、平日の夜間といえども定期的に通学することは困難であると述べた。通信制大学院のデメリットとして感じたこととして教員とのコンタクトが少ない点を挙げ、通信制の場合でも自宅から近い大学院を、と勧めていた。

藤江氏の大学通信教育における学びのきっかけは、妻の勧めから興味本位で産能大学通信教

育部へ入学したことであった。産能大学卒業後は、自身の趣味であった音楽の勉強が通信制でも学べることを知り、大阪芸術大学へ入学する。大阪芸術大学卒業後は、さらに探求すべく、京都造形大学大学院へ進学している。大阪芸術大学では、学費が安いという心理的な怠惰さと、スクーリングが多いということから卒業までに時間を要したが、好きな音楽を学ぶことや新技術を習得できたことで、非常に満足した学びであった、と語った。

3. 学習計画について

石原氏より、勉学の苦勞、特に、修業年限や学習計画に関して問い掛けがあった。3名のパネリストとも、大学院は計画的に単位修得し、規定された修業年数で修了している。その理由として、稲垣氏からは金銭的な理由（留年すると学費を要するため）、木村氏と藤江氏からは講義科目の開講制度や単位修得までの過程（単位制、学期制）の違いについて言及があった。履修開始後、いつでもレポート提出や単位修得試験を受けることが可能な場合は、油断してしまい、卒業・修了が先送りになる恐れがある、とのことである。ただ、修士課程の場合は短期決戦で規定就業年数で修了する社会人も多いのでは、という見方もあった。稲垣氏の経験では、武蔵野大学大学院のレポートは1科目あたりの提出回数が多く、合格しないと次のレポートを提出できないため、学習プログラムを前倒しで行わないと間に合わない、とのことであった。

4. 修士論文について

次の討議事項は、修士論文や研究指導、ゼミに関するものである。稲垣氏からは、2つの通信制大学院で修士論文指導を受けた経験が語られた。最初に履修した大学院は面接指導に積極的で、5回中3回以上が終了条件の面接指導において、5回すべて面接で指導教員から深夜まで指導を受けたという。もう一方の大学院では、面接指導は学生側の選択、という印象であり、4回行われる指導教員において、直接指導がミニマムの1回の学生もいたとのことである。残りの回数は通信での指導となる。そしてこの大学院は放任主義という印象もあり、学生の自主性に任せた結果、大学院修了率も低いのでは、という指摘があった。木村氏の場合は、修士論文ではなく研究課題レポートであったが、研究指導はスクーリングに組み込まれており、メールによる指導や対面指導も頻繁に行われたとのことであった。指導方法に関して、通学制のゼミは学部生から博士課程まで数十人にも参加することも珍しくはないが、通信制では基本的にマンツーマンであり、大きな違いがあったと述べた。藤江氏の在籍した通信制大学院は、複数の教員から指導を受けるが、指導教員からの個別の面接指導は無かったとのことである。修了するためには修士論文か作品制作が必要であり、藤江氏は修士論文を提出したが、大学院のカリキュラムは修士論文を仕上げるような体系的なプログラムであったと述べている。また、修士論文のテーマ設定に関して、出身大学・大学院（工学系）とは異なっていたと発言があった。工学系大学院では、研究は研究室から代々引き継がれるテーマを担当することや、（日常

的な) 研究指導は先輩から行われることが多いが、在籍した通信制大学院では、指導教員からのテーマに関する個別指導は特になく、自由度が高かった、ということが報告された。

5. 修了後の状況

通信制大学院の修了後の会社等における処遇、キャリア形成については、稲垣氏、木村氏、藤江氏、さらに石原氏も、直接的には何ら影響はないとの回答であった。稲垣氏からは、日本では通信制、通学制によらず入社後の学歴は考慮しない文化があるとの指摘があった。しかし、自己にとって興味の幅が広がり、自信の向上や知識の獲得があったと述べている。木村氏、藤江氏も同様であり、木村氏は学ぶことを通して様々な人、本と出会えたことが財産であったとし、藤江氏はこれまでも全く違う分野を学ぶことで洞察力向上へつながったと語っている。また、パネリストの3名とも、自身の仕事と直接的には関連のない学びを経験しており、「仕事と関連のない学びをすることで視野を広げ、結果として仕事へ役立つ」という意見や、仕事と関連のある学びでは、好きで学んでいるのか仕事の延長なのかの線引きがあいまいにある」との意見があり、いずれも、仕事と関連のない学びに対する有用性を強調していた。

6. 今後の学び

フロアとの質疑応答では、博士課程への進学希望と、通信制と通学制のどちらを選択するか、という質問があった。稲垣氏は、2014年から放送大学で博士課程が設置されるため、そこへの進学希望はあるが、学費が予想よりも高額だったということと、現状では準備不足で困難だと回答があった。木村氏は、やってみたい研究はあるが、これまでの修士で行ってきたテーマとは異なるため、現段階では勉強中とのことである。そして、職場環境などとの条件が合えば、通学制で学びたいとのことであった。藤江氏は、通信制の博士課程には学びたい分野が無いため、もし進学する場合は通学制を検討しているが、現状では、働きながら博士論文を書くことは無理そうだと回答であった。学びの経験が豊富な3名のパネリストからは、「博士課程」への進学に対してはやや消極的な発言にも感じたが、学びを積み重ねてきたからこそ、自身の置かれている仕事環境や家庭環境などを客観的に把握し、堅実な回答となったのだろう。博士課程への進学は直ちには実現しないのかもしれないが、御三方とも、パネルディスカッションに先立って行われた宮子あずさ氏と同様、「山があるから登る」ような状態で大学通信教育の学びを享受していると語っており、大学通信教育における学びは今後も継続されていくのだろうと感じた。なお、フロアからは、多数の質問が寄せられたが、時間の都合上、2つ程度の紹介となった。

最後に、パネリストから今後の通信制大学院へ向けた意見が述べられた。稲垣氏は、通信制とは「無理なく継続できる生涯学習のパートナー」であり、学習の「無理・無駄・むら」を最小限にできると強調した。木村氏は、通信制の経験がなく通信制大学院へいきなり入学し、戸

惑う学生は少なくないため、そういった学生に対するサポートが必要と訴えた。藤江氏は、通信制、通学制にかかわらず、“大学院”という学びに対する知識・経験が無いと戸惑う場合があることを指摘した。通信制大学院の自由さに困惑する場合もあるが、それが利点と考えて通信制を選択する学生もあり、学ぶ選択肢が多いことは好ましいと述べた。

パネリストの3名からは、パネルディスカッションに先立ち、以下のメッセージも頂いている。会報等にも掲載されているが、最後にあらためてご紹介したい。

稲垣氏「通学制と比較し、通信制での学びは「時間」「距離」「コスト」等の面でメリットがあります。無論、通学制には充実した対面学習が期待できるのですが、たとえ通信制であったとしても、自分から積極的に働きかけていくことで、通学制に匹敵する学びを得ることも可能です。数々のデメリットののために、進学を諦めていた社会人でも、通信制ならなんとかなるかもしれない。そういうポジティブな方が増えていって欲しいと願っております。」

木村氏「かつての通信教育での学びは、ひらすら本を読んでレポートを書き、試験を受ける、の繰り返しでした。つまり独学が基本でした。しかし、今はインターネットの普及もあり、多様な方法での学習が可能になっています。大学によってはゼミナールも開講しており、利用次第では通学課程に近い学習が可能になってきています。是非とも通信教育を上手にを使って、人生の幅を広げてみて欲しいと思います。大学や大学院である必要はないと思いますが、他人による評価（資格など）があった方が勉強できると思います。」

藤江氏「大学、大学院のカリキュラムというのは良く出来ています。教えて下さる先生方も一流の方々です。ある分野をきっちり勉強したければ、学校という枠の中で学んだ方が絶対身に付きます。また普段、絶対知り合いになることがない人と知り合いになることが出来ます。(先生、学生共)」